

救命記



原作：詠人不知 翻訳：蔵小路タマ



ども、世田谷ネコのタマですよ。お話もいよいよ佳境。破滅への導火線に火がついた、でもまだ誰も気付いていない、ってところかしら。このままずるずる続ければロクな未来はないって気付かない人間、気付いても「まあいいや」な人たち。目の前に出されたご馳走にアトサキ忘れるのはネコの特技と思ってたけど。もっとも、どうせ未来なんか無い、生きてる今のうちに食べておこうなんてシニカルかつホットな動物がいたら尊敬しちゃう。

今回のお話の時代背景は創世記の後半から偽神紀の最後まで。あっちで書けなかった出来事をまとめてみました。じゃ、単なるフォロワーかっていうと違つよ。ノアの箱舟の真相、よくわかる宇宙の構造など、まだ語られたことのない真実が明かされます。事実かどうかは別にして。

原典はブツ切れたつたのよ。あっちの紙から五行、こっちから三行で、整合性を調べるだけでも大騒ぎ。最近、ハナポチも少し大人になって、多少の常識もわかまえて、長野の長老より役に立つんだ。線文字Bはもちろん読めるし、線文字Aも半分わかるって。えっ、ハナポチはシオンの神の子ネコだらうって？、いいからいいから、細かいことは気にしない。なお原典の線文字B文書はバトゥミ共和国のネコペディアで読めます。

んじゃ、どーぞ。

蔵小路タマ

事実の報道

「おーい、撮影機材を調達したいんだが」神様がテレパシーにそう言ったのは、カナン建国の前日。

「映画会社でも始めるんですか？ 映画なんて今どき売れないですよ。それより人間対策の計画書、どうなってます？」

「あ、あれね。ただいま構想中。で、機材は映画じゃなくてビデオ。超小型の音声付きのやつ。隠しカメラにしたんだ」

「まーたあ、どこを隠し撮りするんですか？」
「国防上必要なの。今のところ最重点はベツレヘムあたりかな。人間の行動を監視したいから、あちこちに取り付けて、全部見えるようにしたい」

「全部？ トイレも寝室も？ んなどこ覗いて、人権侵害になりませんか？」

「じゃ訊くけど、神に対する人間の権利ってなに？ それも、免罪されちゃってる人間の」

「んーん、なんか泥仕合の様相」

「そうだろう？ だから気にしなくていいんだよ。そん

な権利より動物たちの防衛権のほうが大切だ」

「初めて神様に負けた気がする。わかりました。何台くらい要ります？」

「すぐくいつぱいだな」

「いつぱい？ ひどくアバウトだなあ。ええとですね、こちらの在庫は二の八乗台ずつ管理してるんで、それで言ってもらうと早いですよ」

「なに、その二の八乗って」

「やっぱわかんないか。今更算数を教えるのも面倒だから、まあ普通に言うとお二百五十六台です」

神様は考えた。ベツレヘムがどんなに小さな村でも、二百台ぼっちでは全部なんか見えないだろう。

そうだなあ、その倍くらいあれば大丈夫かな。

「わかった、それじゃあ乗っているのを二倍にして二の十六乗にしてくれる？」

「はいはい、わかりました。取り付けまでやりましょうか？」

「うん、適当にうまくやって。ばれないように」

「わかってますって。明日の朝までにはクラウド経由で見えるようにしときます」

「んじゃ、頼むわ」

そしてその晩、カメラ一式を背負ってベツレヘムに飛ぶ六万五千五百三十六匹の天使が夜空を埋め尽くした。

翌朝、タブレットを見た神様は「なんかの間違いだろ」と呟いた。カメラは五百台どころではなく、六万台以上ある。それぞれの画像は小さなサムネイルになって、タブレットの画面上でちよろちよろ動き、それをどつくと全画面表示になる。うーん、これはこれでネコのには面白いけど、俺だけで全画面を監視するのはちよつと無理だな。

神様はクロを呼んで、例の馬小屋を映すカメラを探させた。クロは馬小屋の内外に、カメラをなんと十二台も見つけた。うん、これなら見逃す心配はない。神の子は相変わらず飼葉桶ですやすや寝ている。見覚えのあるアダムは屋根に穴を開けている。イブは疲れたのだろう、飼葉桶の横で眠っていた。

そこに入ってきたのは見たことのない老人で、後にイザヤベンダサンとわかる人物だ。

「どうちゃん、何か始まるかも」クロが面白そうに手招きしたので、周りにいた動物たちも集まってきた、みんなタブレットを覗き込んだ。みんなで見

ます。どうしてこういう順番にしたかっていうと、偽神紀を読んでないと、飼葉桶の藁の話なんかわからないから。しょうがないのよ。これがアタシがトイレットパーパーでラッコになつて理由。

その夜、山の上での演説を終えて、少しホツとしながら、神様はカメラの監視をどうしようか考えた。原因不明の理由でカメラの台数がメチャ増えたけど、それ自体は悪いことじゃない。問題は、誰がどうやって全画面を見続けるかだ。俺だけでやるのは絶対に無理。昼間眠くなって居眠りする。カメラ一台に動物一匹が張り付けば……これもダメだ。監視ができるほどの知的な動物がカナンに六万匹もいないだろうし、そいつらの食いもんはどうする？

「おーい、ちよつとまずいことが」
「呼ばれたらロクな話じゃないのは知ってます」テレパシーが答えた。

「六万台も監視できないよ。どうしよう」

「今更そんな。自分でどうにかするんですね」

「んな意地悪言わないで。発注ミスだったんだ。悪かったよ。でもこのままじゃ宝の持ち腐れだよ」

るにはタブレットは小さすぎるが、大型のディスプレイがないので、押し合いながらも我慢した。訳注…えっと、ここから偽神紀の最初に続きます。かなりややこしいのよ。歴史つてそついうもんだよね。同時にいろんなことが起きてるから。

「なんか胡散臭い爺さんだ」クロが唸った。
「手土産に食べ物持ってきたから、そう悪い人ではないだろうよ」神様が言った。

「お土産の種類で決めるの？」アベルが訊く。
「うるさい、黙って見てなさい」マリアがみんなを睨み付けた。「一度しか見れないんだから」

「後でも見れるさ。ちゃんと録画モードにしないと」から」クロはタブレットを齧ったことがあるだけ、使い方も心得ているようだ。

東洋系の爺さんが飼葉桶の藁を取り替えたのを見届けて、動物たちは森の中に帰って行った。もちろん、まだ誰もイザヤベンダサンの悪だくみには気付いていない。神様はやつとタブレットを取り戻して、山の上でどう演説するかを考え始めた。

訳注…ここから創世記二の「山上の垂訓」につながり

「公費だからいいんでは？馬鹿でかいコンサートホールでも建てたんなら目立つけど」

「そういう意味じゃなくて、使えないと困るんだ。きちんと人間を監視したいから」

「ん〜と、じゃ、こうしません？まず全画面を解析して、動きがあった画面だけを表示するのは？」

「それいい！だけど風で草が揺れても画面は動くだろう」

「だから、ある程度の冗長性を持たせてですね」

「ジョーチョーサー、なにそれ？」

「いや、いいです。説明したくない。任せてくれま

すか？そしたら二百画面くらいに減らせますよ」

「うん、任せた」
やつぱ相談してみるものだ。二百なら、もしかしたら一度に見られる。だけど二百？まだ多いなあ。俺一人で見えるの？

「あのさあ、新型の使いにくいやつでいいから、タブレットをね、カナンの動物一匹に一台ずつ配ってくれない？それと大勢で見るとき用に、大型画面のPCも一台」

「えーっ、昨日の今日ですよ。予算っていうものも

考えてください」

「公費だろ」

「なおさらです。それに、カメラの運搬と取付けで天使たちは疲れてます」

「まあまあ、天使もたまには運動しないと」

「じゃ、こういうことにしましょう。神様が人間対策の計画書を書いてくれたら届けます」

「あつ、あれね。書くまでもないってわかった。今言おうか？」実は神様は何も考えていなかった。

「それ、聞くまでもないって気がします。当てましようか」

「多分当たるよ」

「こういうことでしょ。神様としては積極的には何もしない。ただ監視して、危害が人間世界の外に及ぶのだけを防ぐ。どうです？」

「大当たり。その通りだから困っちゃうよね。まあ、書き換えるなら、監視してじゃなくて慈愛の眼差しで見守り、にしてほしい」

「銀河連合の統一統語法に翻訳すると同じになりますけど、まあ換えときます」

「うんうん、それでタブレットはいつ届く？」

トを取り込んでも、人間のすることは面白く見えただからだ。

カナンは最高級のIT環境になった。動物たちはゲームで遊び、世界中のニュースを知り、ネコペディアで知識を蓄え、ベツレヘムの人間活動リアリティーショーを見て楽しんだ。

しかし一方で、神様は何故か憂鬱になったのだ。

「どうしたのさ、ここ二三日ヘンだよ」マリアは神様の不機嫌に気付いていた。

「どうもなあ、いいのか悪いのか」

「なにがよ。一匹で考えて正しい結論出したこと、これまでにあった？」

「うん、ない」

「アタシに言ってみなよ。アタシの意見はいつも正しいの、知ってるでしょ？」

「それは同意しかねるが、言ってみようかな」

「言いなさい」

「はい。えーと、これは疑問なのかどうかもわからないけど、『今日のナザレ』の配信はいいのだろうか？」

「そうだなあ、在庫はありますから、明日にでもホテルの前に届けましょう。また天使に運ばせるんで、ご苦労さんくらい言ってくださいね」

「ああいいよ。マタタビ茶くらい飲ませよう」

「そんなもの天使は飲みません。でね、大画面のPCですけど、神様の環境じゃ使えません」

「どうしてさ。田舎だから？」

「電気がないと動かないからです。タブレットは僻地に改造したもので、全体が光電池になってますから自然に充電しますけど、大画面モニタは電気食うんで無理です」

「そうか、知らなかった。充電なんかしなくても動くと思ってた」

「何も食わなくても動けるのは神様だけです」

こうして神様は宿題を誤魔化し、ついでに大量のタブレットを手に入れた。カナンの動物たち全員は一台ずつタブレットを持つようになり、クラウドにあるどんなソフトでも自由に使えるようになった。

クロはタブレットを手にしたその日から動画編集を覚え、『今日のナザレ』をストーリーミング配信し始めた。素材には不自由しなかったという。どのカツ

「なに言ってるの。アタシの子のクロがやってるんだからね。間違ってるじゃない」

「いや、怒るな。違うから。クロが一生懸命やって、内容的にもあいつのバランス感覚が適正なのはわかるよ。だけどさ、いろんなカメラからの映像を、切り張りして面白く並べてるだろ。それがさあ」

「面白くて悪い？ いい編集センスしてると思うけどなあ」

「いや、センスはいいし技術も確かだ。そうじゃなくて、俺はまっさらの生の素材をみんなに見てもらって、各自に判断してほしいかったんだ。一切何も変えずに」

「クロだって何も変えてないでしょ」

「そうだけどさ、編集してるのは事実だろ。クロはいろいろ考えて配慮してるけど、やっぱりクロの視点っていうか価値観っていうか倫理性っていうか、入ってこない？」

「アタシの子は機械じゃないからね。脳ミソだってあるから、なんか考えが入るに決まってる」

「そこなんだよ。良い悪いじゃないんだ。どんなにクロが気を遣っても完全な客観性は無理だから」

「そのどこが悪いのよ？ 所詮ドキュメンタリーなんてドラマと地続きじゃないの。ましてカメラなんか使ったら、見えるところだけが事実で、カメラに写らないものは無いのと同じになるんだから」

「げっ、マリアはどこで勉強したんだ」

「アタシだってたまには本くらい読むよ。それとも馬鹿なメスネコのままがよかった？」

「いや、偉いなと思ってさ。そんなら話は早いや。俺はベツレヘムのカメラで、みんなに事実を知ってほしかったんだ。判断は皆さんに任せますって」

「あのさあ神様、それは土台無理でしょ。山の上の話でもあったけど、この動物たちは、言葉じゃ言えないモヤモヤとした共通の正義感を持つてるから、どうしてもその気分を通してしか『今日のナザレ』を見ないと思う。簡単に言えば、人間って馬鹿だなあ、って」

「やっぱ俺の理想は無理かなあ」

「ゼーッタイ無理。だけど、神様がどう思おうと、みんなはきちんと判断するから、心配ないよ」

俺の気の回しすぎかもしれない。まあ、今のところは静観するしかないだろう。と、いって、静観しな

仏教伝来

それから何年か経った。人間の世界にはいろいろあったみたいだが、カナン国に大きな変化はなく、動物たちはずーっとゆるゆる暮らしていた。寿命の短い動物たちはすでに代替わりしていて、カナンの子という言い方も普通になった。カナンは動物たちの故郷になり、動物たちの国になり、ナシヨナリズムのようなものも芽生え始めたように感じられた。それが妙な国防意識と混ざらなければいいが、と神様は心配だったが、特にそういう心配はまったくなく、辺境の防衛を任されているカバ、ワニ、海鳥、地ネズミたちにしても自衛隊になった自覚も防衛の仕事に就いている意識も極めて希薄で、以前と同じようにウダウダ暮らしていた。

ホテル・シオンにはもう一枚、新しい看板が掛けられた。『カナン国政府』。国なんだから政府庁舎くらいなくちゃ、というサルたちの要望で、とにかく看板だけは出したのだ。ロビーがマリアの執務室になり、神様は屋根裏の一角に住み着いて、汚い字で

いとなれば、それは報道規制になるからもつとイヤなのだが。

「それからねえ、ルンバ、ジルバ、タンゴの三匹がカメラを欲しいんだってアタシに言ってきた。カメラで自分たちの番組を作りたいんだってさ、どうする？」マリアは毛づくろいしながら言った。

神様の思考回路に危険信号がともった。まさか動物至上主義の宣伝番組じゃないよね。

「どんな番組？」

「なんでも、国技のミーアキャットダンスの普及番組とか。初級編から何回かに分けて作りたいって」

「国技なのか？」

「あの三匹はそう言ってる。アタシは知らない」

「なんだ、そんなものか。毒にも薬にもなりそうもないから、カメラは手に入れてやるよ」

「よかった。喜ぶよ。で、カメラがあれば、クレバスとハナポチが画期的で斬新なニュース番組を作るとも言ってた」

おいおい、そっちのほうの方が怖いかもな。でも、これは自分の子どもたちを信じるしかないだろう。神様はカメラを一台、テレパシーに発注した。

『神様駐在所』と書いた札を下げた。国家が安定している限り、政府なんてこんなものでいいのだ。

カナンのストリーミング放送には、神様が心配したほどの偏向はなかった。時事ネタを扱う定時放送は『今日のナザレ』と『カナンニュース』だけで、あとは生活密着型の実用番組、軽い娯楽番組ばかり。しかもすべて不定期の単発だった。考えてみれば、動物たちが「一日一本」なんていう制作義務を好むわけはなく、ドキュメンタリーにしても世論操作やヤラセなど、面倒だからするわけがない。どうやら神様は人間の思考方法に少々毒されていたようだ。

今日も神様は屋根裏で『いろんな仲間訪問』という、タイトルからして無策の番組を見ていた。カンガルとウサギのチームが作っているらしい。今回の訪問先は天竺教神様派宇宙山河南寺。そんな場所、聞いたことないぞ。画面中央にいきなり愛想良く出てきたのは、わが子ヨハネだった。

現在三匹のネコが切磋琢磨の修行をしているという。画面が切り替わるとカインとアベルが向き合っ

て座り、「東海に魚あり。尾もなくカシラもなく、中の支骨を断つ。セツパ！」と怒鳴り合っている。

「なんじゃこりゃ？新種の謎かけか？カメラが近付き、アナウンサーがアベルに話しかけた。

「いやあ、すごい迫力ですね。これは一体なんですか」アベルが笑顔でカメラを見据え、「問答というものでして、悟りを得るための第一歩になります」

「悟りとは、わかりやすく言うと、どういうことでしょうか」

「はい、それは悟ってみないとわかりません」

「あなたは悟った？」

「もちろんまだです」

あまりに平然と答えるアベルは、どう見ても自己矛盾に気付いていない宗教中毒の阿呆だ。こいつらを放っておいた俺がいけなかった。

「マリアーツ、ちよつと来てよ」神様は屋根裏から叫んだ。「こいつら、すぐに呼んでくれる」

「カナンでは誰にも迷惑かけない限り、何をどう考えようと、何をしようと、そりゃ自由だよ。けどな、俺も一応親だから、お前らに訊くしかないんだが、悟りってなあに？」

神様は目の前にかしこまって座っている三匹に訊

俺はそこが無だとは意識しなかったから、そこが無だったかどうかはわからない」

三匹は驚いて飛び上がった。

「すげえ、やつぱとうちゃん様だ」と、カイン。「そんな褒めるなよ。嬉しくなるだろ」そうか、こんな調子でいいんだ。

ヨハネがおずおずと、「あのね、もうひとついい？風が吹くと木の枝が揺れるよね。その木の枝は風に逆らってるの？それともなびいてるの？」

ほら来た。こりゃ本質論だな。神様は以前、何万年も一匹で座っていたとき、そんなことを考えたこともあった。「どっちでもないよ。木の枝は木の枝だ。揺れてるって？それはどうかな。木の枝は止まってるで周りで風が動いてるだけじゃん」

三匹は腰を抜き、あわてて座り直して神様を拝み始めた。

「こら、やめろ。拜まれるほど偉い神様じゃない」

「いえ、神様を拜んでいるではありません。仏を拜んです。多分、如来だろうな」

その日から三匹は、神様を老師と呼び始めた。なんだかジジイになった気分。まあね、かなり長い間

いた。三匹は顔を見合わせ、まずヨハネが答えた。「ええと、まだこの中の誰も悟ってないので確かなことは言えませんが、周囲のすべてを、そのまんま完全に受け入れることだと思えます」

次にアベルが答えた。

「すべてのモノゴトの本質は仏なんです。動物も植物も、それから言葉もです。それを発見して捉まえて、そのまんまで見ているのが悟りです、多分」

最後にカインが言った。

「結局、全部は無なんです。同時に有でもありません。両方は対立するものじゃないと一点の曇りもなく受け入れる自分になることではないでしょうか」

神様には理解不能だ。三匹は全然違ったことを言ってる。どうつなげればひとつになるんだ。

「ちつともわかんない。まあ俺は勘が鋭いほうじゃないから理解できないのかもしれないが、もう少し具体的な話で言えない？」

「それでは、つと」カインが神様を見つめた。「どうちゃん、無ってわかりますか？」

「そりゃわかるさ。俺が世界を作る前には、お前が座ってるその場所自体が無だったからね。ただな、

生きてるから、老師でも仕方ないか。

どうやら三匹がやっているのは、その昔、天竺のシッダールタ君が思い悩んでいた哲学らしい。あれも宗教なんだろうか？たしかに、尾ひれが付いて五十六億七千万年後にシッダールタが甦るとか言い出せば御信心になるけど、そんなのがなければ一番プリミティブな哲学だろう。今のところ三匹とも健全な哲学ネコだ。

「あの子たち、何やってんの？言ってることがまるつきりわかんない」マリアが不満そうに言った。

「東の国に旅をさせたせいでよ。ホントのホントのことを探したくなってるだけ」

「へえー、そうなんだ。アタシにはホントもウソも全部同じで、大した問題じゃなく思えるけどな」

「そうだよ、同じだよ。ウソかホントか決めるのは、その時の自分だからね。神様であろうと蟻んこであろうと」

「じゃ、アタシの生き方は正しい」

かくして神様はカナンに仏教らしきものが到来したのを知ったのだ。

入植者ノア

「神様、忙しい？」川沿いに住んでいる地ネズミがホテル・シオンの屋根裏にやって来た。

「全然、まったく徹底してヒマ。これ、食うか？」神様はクルミを一個、地ネズミに渡した。

「すみませんね、手土産も持ってこないのに。いただきます」地ネズミは齧り始めた。

「遊びに来てくれたの？それとも何か用かな？」

「ま、どっちかと言えば報告っていうか相談っていうか」

「いいよ、何でも言っつて。多分解決できないけど」

「ほんじゃ言いますが、えつと、最近ね、命がけで川を渡って来る動物がいるんですよ。鳥も勝手に飛んで来るみたいで、カラスの親分が巢の割り当てで困ってます」

「動物って、どんな？」

「いろんなの。ネズミからリスから、牛、馬、キリン、象、なんでも。犬やオオカミも多いかな」

「いつごろから？」

「関係なんか誰もわかんないです。だけどカラスたちは、あれが凶兆だったって信じてて、ハトを帰すんじゃないかった、食っちゃまえばよかったって言ってます」

「うん、専守防衛の観点からはカラスが正しいかもしれない。ちよつと過剰防衛だが」

「どつちみち後の祭りでしょ。もう実際、動物たちは押しかけてるんで、少ない日でも十匹くらい、多い日は百匹以上」

「そんなに！で、どう扱ってるの？」

「神様が山の上で言ったように、来るもの拒まずだから、同じ種類の動物を紹介して定住できるように面倒見ます。結構大変らしいよ」

うーん、もしかすると一種の国家的危機が始まりかけてるのかも。そう広くないカナンに、わんさか動物が入って来たらどうなるか、想像力が薄弱な神様でも想像がついた。

「わかった。来てくれてありがとう。なんかできるか、なんもできないか、これからすぐ考えるからね」

地ネズミの言葉を信じないわけじゃないが、神様は調査係としてタイガとキジシロを川に向けて出発

「三ヶ月くらい前かなあ。最初にハトが来て、それから」

地ネズミの話によると、最初にハトが川の向こうから来たという。一羽で飛んできて、「わーい、陸地だ陸地だ」とクウクウ言いながら川つぷちに降りた。カラスたちはハトを仮想敵とは思っていないから、特に追い払いはせずに遠巻きに見ていた。

ハトはあたりを歩き回って、「うん、環境は申し分ない。食べ物も多そう。何か食べたくなつたな」と独り言を言ったので、地ネズミはミミズのいる場所を教えてやった。ハトは立て続けに三十匹も食べて、げつぷをしながら「どつかにオリーブの木はない？」と訊いた。

オリーブも食いたいのだろうかと思いつながら、アラファト山を教えてやった。ハトは山に向かって飛んで行って、しばらくするとオリーブの枝をくわえて、川を渡って帰って行った。

「多分あれが最初です。それからですよ、いろんな動物が泳いで来るようになったのは」

「ハトとオリーブの枝と動物たちが来るようになったのは、なんか関係あるの？」

させた。報告は毎日、メールではなく、誰でも読めるブログできるように言っておいた。良い話も悪い話も、全部隠さずに伝えるのが方針だからだ。

いやはや、油断してたのがいけない。ベツレヘムのカメラで人間ばかり見ていて、その他の世界情勢を忘れてた。遅ればせながらタブレットを開き、世界中のマップと空撮写真をじっくり眺めて神様は驚いた。美しく広大な野原など、もうどこにもない。完全に消滅していた。人間が畑を作るのに適した土地はすべて開拓し尽くされ、せせこましく区分けされていた。北と南の寒い地域と、山と谷が連なる場所だけはさすがに手付かずだったが、平地には一寸の自然も、もう残っていなかった。

そして街はさらに増え、道路だけでなく鉄道馬車まで走っている。人間の生活は大きく変化していた。巨大な建物が連なり、工場らしき建物からはモクモクと黒い煙が上がっている。一般に、こういう発展を進歩というのだろう。

そうか、人間風の飽くなき発展を目指す、こういうことになるんだ。俺の考えている理想では、決してこうはならない。カナンが俺の理想だ。人間の

ように、懸命にマナジリを決して進歩に邁進する理由は、一体なんだ？ 今年は去年と同じ、来年は今年と同じでは、どうしていけないんだろう。それとも人間は、走り続けたいと死んじやうのかな？

「これじゃ住みにくいよね。ライオンなんか住む場所がないじゃないの」横で見ているマリアが言った。「山の上で演説した通りになっちまった」

「神様が言ったからその通りになったのかもね」「また俺のせいにする。心の中じゃ、こうならないように神仏に願かけてたんだ。ダメだったから願ほどこに行かないで済むけどさ」

そのとき、タブレットから声が聞こえてきた。「とうちゃん、神様、聞こえる？」キジシロの声だ。「えっ、なんで機械がしゃべるの？」

「あんた取説読んでないでしょ。これ、電話にもなるのよ。はい、キジシロ、なあに？」マリアが代わりに答えた。

「今、河原にいるの。人間と一緒にだよ。ちつとも怖くないよ。画面に出すからね」

痩せてボロをまとった男が映った。ヒゲは延び放題で薄汚いが、どこか善良そうだ。向こうのタブレット

トには神様の姿が映っているのだろう、男はネコが映ったのでビックリしている。

「えーと、あの、ノアといます。はじめまして」

「ノアさんですか。私は神様です。横にいるのがマリア。こちらこそはじめまして。どこから来たの？」

「川向こうからです。川の南側がどうなっているのか見に来ました。それと、こっちに渡った動物たちが帰って来ないので、無事かなと思って」

「ああ、そういうこと。みんな無事で元気なはずですよ。地ネズミとワニとカバが担当なので、訊いてみてください。カラスにもね」

「よかった、安心しました。少し前にハトを偵察に来させたら、住み良さそうだと行ってたので、まず緊急避難の動物を来させたんですが」

「うんうん、受け入れますよ。まだ沢山いるのかな」「はい、私のNPOに登録している哺乳類だけで六十万匹くらいいます」

待て、ウソだろ。全部ネズミだったとしても六十万匹は多すぎる。これは大変だ。

「ノアさん、電話じゃなんだから、悪いけどここまで来てくれますか？ 子どもに案内させるから」

「もちろんお伺いします」

「キジシロ、丁寧にご案内しろ。それと、サルたちに言って食料を差し上げる」

「はい、とうちゃん、了解しました」

さて、この脱北者たちへの対策はどうしたもんだろう。カナンをあてにして逃げて来るんだから、あてにされたら応えなきゃ。だけど、そんなに土地があるのかな？

「受け入れますよなんて安請け合いですで大丈夫なの？」マリアも心配そうだ。

「六十万匹って聞く前に言っちゃたからなあ。困ったねえ」

「困るだけなら誰でもできるでしょ。それに、カナンは住み心地がいいって知れたら人間も押し寄せるかもしれない。どうするのよ」

「人間かあ、それはやだなあ。どうするかなあ」

「神様っ、しっかりしてちょうだい！ わかんなきゃテレなんとかに相談したらっ？」

そうだ、困ったときのテレパシー頼みだ。

「聞いているか？」

「はいはい、全部見ました。当然の経過ですね。あつちの世界では弱い品種がどんどん死滅します。絶滅しそうな動物も赤一覽という本に満載です」

「それには人間は入っていないの？」

「冗談でしょ。爆発的に増えてます」

「やっぱね」

「で、六十万匹受け入れますか？」

「そうしたいけど、食い物がなくなると共食いなんが始めたら地獄だからなあ。何匹くらいなら大丈夫なんだろ」

「それは肉食獣、草食獣、それぞれの大型小型で違うと思いますよ。もう一回あのソフト使ってみたらどうでしょう。今はバージョンアップして『新・新世界で行こう・スーパーエポリューション』になっています」

名案！ シミュレーションすればいいんだ。神様は早速ソフトを起動した。そしてチュートリアルを読んでいると、マリアが「こんなの読まなくてもできるじゃん」とタブレットを取り上げ、シミュレーションモードにした。

「ええと、まず地政学的なデータね」マリアはどんなデータを置いていった。「うん、これで現状の解析、つと」

この世界で最初にタブレットを使ったのは俺だ。けど今では、カナンで一番不器用なユーザーになったみたい。このあいだなんか、大きな蟻がタッチパネルで猛スピードでテキストを打ってたっけ。

「はい、出たよ」マリアが結果を見せた。数字が並んだリストのようなものだ。どういう意味だろう。「全然わかんないんだけど」

「アタシだってわかんないよ。おい、クロ、ちょっとお」マリアが木陰で寝ていたクロを呼んだ。

クロによれば、カナンは理想的な生態系を維持しているという。すべてにバランスが取れていて、減らすものも増やすものもないらしい。

「それじゃ困るんだ。これからいろんな動物が六十万匹増える予定でね。大丈夫かな？」

「蟻なんかなら六十万くらい増えても平気だろうけど、ネコだと困るな」

「どうすりゃいい？」

「んーんと、まずひとつには拡大策があるよね。西

と東の砂漠を緑化して住めるようにする」

「簡単か？」

「工事だけなら、主に水路だから象に頼めば一年くらいでできるけど、そこをジャングルにするのは数十年かなあ。とうちゃんが魔法を使えば別だよ」

「魔法なんて使えないよ。数十年なんて、それ、だめじゃん。間に合わないよ。他に考えは？」

「そうだなあ、もうひとつは移民規制だろうな。カナンの宗旨に合わないけど。六十万匹全部じゃなくて、今の状態を壊さない程度だけ受け入れればいい」

「どのくらい来させていいのかな」

「多分、このソフトで計算できるはずだけど、僕にはやりかたがわからない」

「アタシもわかんないからね」マリアも素早く言った。

「やっぱりテレパシーだ。呼ばれると思ってました。それで、要するに何匹受け入れられるかを計算すればいいでしょ？」

「そうそう」

「今の最適な状態を維持するなら、ざっくり言って五万匹ですね。それくらいなら環境的なストレスは

無いも同然です」

「全部ライオンでも？」

「そりゃダメですよ。小鳥からリスから、全部を最適なバランスでの話です」

「ちょっとなあ、ノアに答えにくい数字だなあ。希望の一分以下だから」

「小動物と鳥類ならもう少し増やせますよ。木の実は余ってるし、羽虫、蚊、ハエはうじゃうじゃいるんで。ただ、そうすると肉食動物が少し足りなくなりますね」

「あーあ、また持続可能な生物多様性のことかよ」

「はい、常にそういうことです」

「じゃ、さつきクロが言ってた砂漠の緑地化はどうだ？」

「やるべきです。砂漠にはヘビやトカゲ、糞ころがしなんかがありますが、よく話をして奥のほうに移住してもらえば済みます。それで植物さえ生えれば、希望はあります」

「希望ね。俺は希望や期待は裏切られるものだと思うがね。やらないよりマシってことか」

「何事も悲観しているほうが安全です」

「それじゃあ、たとえば、カナンの環境が少し悪くなってもいいってしたら、どのくらい受け入れられる？」

「悪くなりかたにもいろいろあるんで、一概には言えません」

「んじや、最悪の状態で、共食いが始まる直前って言うのは？」

「やだな、答えたくないな、そんな数字。言わなきゃダメですか？」

「俺だって聞きたくないよ。でも、参考までに」

「はい、六十万匹です。ですが、人間の住んでいる環境を考えれば、どの街でもこの密集の限界を超えています。どこもかしこも人間だらけでギッシリ。それでも共食いは起きていません。もしかすると、少し精神状態がおかしくなるだけで、生きてく分には大丈夫なのかもしれません」

「なるほど、人間が気違いじみてるのは当然か。なんだってまた、わざわざ一箇所に集まるの？ 広々した所で昼寝したいって思わないのかね」

神様は決断を下した。まず三十万匹受け入れて様

子を見ることにしたのだ。三十万匹という数字には理屈も根拠も無いから、これは純粹に政治的決断だ。東西の砂漠も改造すると決めた。暇そうに遊んでいた北方組の三匹、クレバス、ツンドラ、タイガを砂漠改良の担当にして、象のハンニバルを工事責任者に任命したら、どういうわけかほっとした。

徹夜で歩いて来たノアを、神様はロビーで丁寧に迎えた。

「遠いところをご足労かけました。食べ物は足りていますか？」と、りあえず敬語を使おう。

「はじめまして、ノアです。あの、失礼ですがあなたが神様ですか？昨日の動く絵でもそうでしたが」「はい、私が神様です。っていうか、この世界を作ったんでそう呼ばれてるだけで。その他にはたいしたことはいません」

「いや、どうも。私はこれまで大間違っていたようです。神様といえば必ず人間の形をしていて、会うこともできずに声も聞けないと信じていました。預言者を通してお話を漏れ承るだけで」

「いやいや、それも多分神様でしょう。本当にいる

かどうかは別として、宗教上の神様は何人いても構いません。私は彼らを『ニセモノ』なんて言う気はありませんから」

「ああ、なんと広いお心をお持ちだ」ノアは思わず跪いた。

「ノアさん、俺はそんなに偉くないから、拜まれても困る。どうぞお顔を上げてください」

「これは奇跡だ。生きている間に神様に出会えるなんて。日頃の信仰の賜物、神がお引き合わせになったのだ……えっと、どの神様がお引き合わせになったのかな？」

「ほら、難しくなるから考えないほうがいいですよ」

ノアは感動と同時に混乱していた。もし彼が力チカチに凝り固まった原理主義の教徒だったら、このネコ型神様を邪神と切り捨てたに違いない。しかし、この神様はどことなく本物に見えた。ただ、ネコっぽいのはね。いずれにしても、ここは直感に従って信じよう。助けてくれそうな神様は、目の前のネコ神だけだから。ノアは川を渡って来た理由を話すことにした。

ノアはごく初期の開拓地入植者だった。民族の繁栄のため、若い血に燃えて、とんでもない辺境の川沿いに入植し、ジャングルを切り拓き、かみさんと二人で家を建てた。川で魚を採り、荒地を畑に変え、家畜を飼って生活した。仕事は苦しかったがどうか自給自足でき、ギリギリだが暮らして行けた。

「そうなんだよ。人間全員があなたみたいに欲張らずに生きれば何の問題も起きないんだ」と、神様。「いいえ、欲はありました。もっと働きたいと思っていました。特に子どもが生まれてからは」

「それは欲とは言わんだらう。必要と言っただけで、子どもに街で売っているきれいな服を着せたかったこともあります」

「親心だな。仕方あるまい」

「それに、子どもにはラクをさせて、大学にも行かせて、立派な金持ちになってほしかった」

「親心だが、それは欲かもしれないね。人情としては当然だが」

「それじゃ、あのう、欲と人情の境目はどこにあるんでしょうか？」

人間もやっぱり難しいことを訊く。神様だからっ

て、何でも答えられるわけじゃないんだ。

「ちょっといいかなあ」キジシロが何か言いたそうにもじもじした。「欲っていうのは必ずあるのよ。いい欲と悪い欲があるんじゃないかしら。他の人間や動物を蹴散らしても偉くなるうとするのが悪い欲だと思う」

「さすがわが娘、正解だ」神様は答えに満足した。

「けどね」キジシロは続けた。「立派な金持ちになるのは、それ自体良くないような気がするの。『今日のナザレ』見ていると、金持ちって構造的に悪いでしょう」

たしかに。善人の金持ちは見たことがない。善人と金持ちは矛盾する概念なんだろうか。難しいな。

「だいたい話が外れてきたね。この議論は後ですとして、ノアさん、向こう岸の話の話を続けてください」

ノアには男の子が三人できた。三人とも働き者だったので、畑は広くなり家畜は増えた。冬に向けて充分な蓄えもできて、入植して以来、少しは豊かさを感じられるまでになった。ここまで来るのに長い時間がかかった。ノアには五百年ほどに思えたが、

かみさんは、そんな昔から世界があつたはずはないからノアの錯覚だろうと言つた。それはともかく、生活がうまく行つていたのはこの頃までだ。

ある日ノアは川の水が汚れ始めているのに気付いた。魚が白い腹を出して浮いている。水を飲んでみると妙な臭いがして舌にピリツときた。これでは家畜に飲ませられない。しばらく様子を見て汚れは酷くなるばかり。急いで井戸を掘り、人間と動物の飲み水にした。そのときに作った家畜用の水飲み場が、今回の動物移住の発端になつたのだ。夜中になると森の様々な動物が水を飲みに来た。半月ほど経つと、周辺の野生動物のほとんどがノアの水を頼りにするようになった。川の汚染は日ごとに進んだ。

その頃、三キロほど上流のお隣さんが引越しの挨拶にやつて来た。この地に同時に入植した愛国者の仲間だ。川の汚染に気付くのが遅れて、家畜のほとんどを死なせてしまったという。最近では空気も臭くなり、風のない日は外に出られないから畑も耕せない。もうダメだから都会に出てホームレスになるしかないと言う。

ノアにとって、とても他人事ではなかつた。神が

ノアにはもうひとつ気掛かりがあつた。森の動物たちだ。放置すれば死んでしまう。現に、最近カワセミの姿を見ない。毒の魚を食べて死に絶えたのだろうか。人間の仕業で動物が死にそうなのに、そんな悪い土地から、人間だけ逃げ出してもいいのだろうか。そんなこと、神は許さだろうか。

ノアは決めた。畑を作れなくても内陸に移ろう。森の動物も、周辺の平原の動物も、連れて行けるだけ連れて行く。先行きどうなるかはわからないけれど、放置して徐々に死なせるのは神の御心に適うはずがない。ノアはかみさんと三人の息子に決定を伝えた。もちろん全員が賛成した。

そんな折、運が良かったのは、家畜の中にエドという馬がいたことだ。どういうわけかこの馬は人間の言葉をしゃべり、動物の言葉もわかるらしい。ノアはエドに、内陸に移ることをなるべく多くの動物に伝えるように頼んだ。エドは森を走り回り、平野を横切つてノアの言葉をすべての動物に伝えた。

ノア一家が引越しの準備をしていると、見知らぬ馬車がやつて来た。車体各所に金銀の金具をあしら

与えた試練にしては少し残酷すぎると言うのと、隣人は苦笑して「神様じゃないよ。工業地帯が原因だ」と教えてくれた。

たしかに川のずっと上流に、大きな工場がいくつもできたのは風の噂で知つていた。製鉄工場、煉瓦工場、肥料工場など、ペンダサン系列の会社だという。工場は汚い廃水を川に垂れ流し、真っ黒い煙をモクモク吐き出しているらしい。

「井戸水もそろそろ危なくなるよ。うちの井戸はもう臭くて使えないから」と隣人は言った。

ノアは饑別に小麦を一袋と、とうもろこしを抱えられるだけ渡した。それ以上できない自分が悔しかつた。

その日からノアの家族は善後策を真剣に考え始めた。もつと下流に移住するのも一手だが、いざ汚染はやつて来る。最後には海まで広がるに違いない。どうせ川が使えないのなら、川岸を離れて内陸に移るのはどうだろう。だが、内陸側はすぐそばまで山が迫つていて、広い畑を作るのは難しい。隣人がこの地を捨てる決意をしたのもよくわかる。

い、金文字でベンダサン商会と書いてある。馬車から降りたのはウリエルという小男で、ノアに係長代理の名刺を差し出した。要するに平社員だ。

小男はいきなり言った。「ここから立ち退いてください」

三兄弟の長男セムはこれにムカツときて、「そういう挨拶は聞いたことがない。味噌汁で顔洗つて出直して来い」と怒鳴つた。小男ウリエルは、まったく動じず、「ここにリバーサイドランドという娯楽施設を作ります。邪魔ですからどいてください。立ち退き料に一タラントあげます。期日は一ヶ月です。でよろしく」

今度は次男のハムが切れて、「知らないね、そんなランドとやらは。どっちみち引越すつもりだったけど、出てけと言われると居座りたくならあ」

「ゴルフ場とホテルとアトラクション施設ができるんですよ。オリエントランドって知りませんか？ネズミの着ぐるみのキャラが有名ですが」

「この辺には本物のネズミがうようよいるから着ぐるみは間に合つたらあ。大体誰が、そんなもの作るのが許可したんだ。俺たちの土地だぞ」

「もちろんベンダサン商会と宗教指導者のラビです」「ラビが許したかラバが蹴飛ばしたか知らないけど、こつちには相談なんかなかったけどな」「ご相談の必要はありません。すべてこちらで決めましたので」

黙って聞いていたノアが間に入った。

「セム、ハム、言っても無駄だ。この人には何の決定権も交渉権もない。かわいそうな使い走りだよ」

それでも交渉は夜中までかかった。せっかく来て下さったのだから、こちらの言い分も聞いていたどころというわけで、小男は椅子に縛り付けられ、出入り口にはセム、ハムと末息子のヤペテが短刀を持って立った。

小男はグダグダと泣き言を言いつつ、ノア一家が奥地に引越すことを認めた。ただし、その土地も一年後に明け渡してほしいと言う。ノアたちにしても、隣に遊園地などできたら今の生活はできないし、ベンダサンに楯突いても無駄だから、それは了承した。一年後にどこに引越すのか、あては全然なかった。立ち退き料の一タラントを突き返して、最後にノアが言った。

ようになり、一ヶ月も経ったころには、どんな動物とでも自由に話せるようになっていた。神もまだ私を捨ててはいない、とノアは感謝した。

動物たちはみな、故郷に似た環境がいいと言う。しかし中にはサイのように、移住自体に反対で、動物軍を作って工場地帯に攻め込み、工場を全部ぶっ壊せば済む、という意見もあった。できればノアもそうしたかったが、人間はいくらでもいて、この上なくしぶとい。壊した工場は即座に建て直されるだろう。蟻の巣をいくら壊してもすぐに復活するように。いや、蟻よりずっとたちが悪いから、より大きく建て直すはずだ。やはり、こちらが逃げるしかないのだ。そう言っただけでサイを説得した。

どこに行くにせよ移動には船を使おう。人間の街は世界に点在している。歩いて移動すれば必要な接触も起きるだろう。侵入者を敵としか見ない人間は、動物の群れに襲い掛かってくるに違いない。自分たちの知っているものしか許容しないのが人間だ。ノア自身、自分が人間なのがいやになってきた。

移動には川を使えばいくらか安全だろう。川岸から少し離れて、弓矢の範囲内に入らなければいい。

「話は終わったようだな、ウリエル君。あんたは他人と約束できる立場じゃないだろうが、一応言っておくと、ちょうどここら辺はライオンの狩場でね、へたに出歩くと獲物と間違えられるよ。それに象の通り道もある。子持ちの象が怖いのは知ってるね。象の道の地図は一年後に描いてあげよう」

一方、エドの話聞いた動物たちは、大挙してノアの家に押し寄せた。夜行性のモモンガが昼間に訪ねて来るなど、動物たちは動揺し、大混乱だった。なにしろ水と空気に毒が混ざっているのだ。もちろん食べ物も安全ではないだろう。みんな一刻も早い移住を望んでいた。

ノアは集まった動物たちを全員引き連れ、五キロほど奥地に移り、そこにバラックを建てた。長居は出来ない。一年後には本格的な移住を敢行しなくてはならない。永住の地探しが始まった。

どこへ行くか、どうやって行くか、まず、動物たちの希望を聞いた。最初はエドに通訳してもらっていたが、不思議なことに、一日中動物の言葉を聴いていると、ノアは少しずつだが動物語を理解できる

ノアは三人の息子に、なるべく大きな船を作るように命じた。形などは気にしない。たとえ船の形をしていなくてもいい。多くの動物が乗れるよう、総二階建て、できれば部分的に三階建てにするようにとも言った。

移住先探しにカラスが偵察を買って出た。川沿いに海の方へ飛び回って、良さそうな土地を探したという。ノアは強そうな大カラスを選び、偵察隊として送り出した。

カラスは毎日出かけ、毎日「だめだあ」と言いながら帰って来た。良い土地はすでに人間に使われてしまっている。残っているのは草も生えない砂漠と断崖絶壁の斜面くらいで、ときどき「おや、いいかな」と思っただけを見るとゴミ捨て場だったりする。「おれたちが住んでた場所が最後の楽園だったのかもしれませんね」と、カラスが嘆いた。

ノアは煮詰まってしまうた。移住先探しなどそれほど難しくはないだろうと甘く見て、移動方法の計画は最初から考え直さなければならぬ。世界はそれほど満員なんだろうか。どこかに新天地はない

ものだろうか。

ノアの計画は世界中の動物の間にじわじわと知れ渡り、悩みで眠れないノアに、またひとつ悩みを増やした。どうやらこの手の問題は世界中で起きているらしく、あっちこっちの動物から「移住するなら連れてってください。どこまで行けばみなさんと合流できますか？」といった問い合わせが続々と届き始めたのだ。エドと飼いネコのタマが窓口になって対応し、問合せ数を集計すると、全部で六十万匹近くが移住を求めているとわかった。とてもノア一人で対処できる数ではない。といって、「あなたは無理です」とも答えられない。えい、毒を食らわば皿まで、頼られて断わったら男がすたる。ノアは、移住の暁には六十万匹全部連れて行こうと無謀な決心をした。

そんなある日、コロンブスという名のハトがノアに言った。「川の向こうはダメですか？川なんだから両側に岸があるはずでしょ。たしかにこの川は無限の広さだっという噂ですけど、確かめたわけじゃないでしょ。大体、岸が片方にしかない川なんて見たことありません」

アイドル登場

「船で移住してくるなら、いつぺんに六十万匹じゃないんだね？」神様は少し安心した。「ノアさん、ご覧の通りカナン国はたいして広くない。いつぺんに大量の移民が来たら、みんな食えなくなつて共倒れしちゃう。でね、生態学的に計算した結果を元に、ちょっと考えたんだが、三十万匹なら受け入れられるかなって思うんだけど、どうだろうか？」

言い出しにくいことは最初に言うに限る。神様は心苦しいのを押し殺して言った。

「えっ、半分ですか。弱つたなあ。どうやって生き延びる動物と死ぬ運命の動物を分けたいいんでしようか」

「そう言われるとなあ、どうすりゃいいんだ」神様はぼつが悪くてもじもじした。

聞いていたキジシロが驚いた目で神様を見た。「あのさ、とうちゃん。よくわかんないんだけど、とうちゃんが世界を作ったんだよね」

「そうだ。それについてはもう俺を責めるな。心か

「おお、すごいことを言うね。でも、たしかにそうだ。どんなに幅の広い川でも、必ずどこかに向こう岸があるはずだ。まだ誰も行ったことはないが」ノアの頭の中で卵が立った。

「ために私が見てきましょう」ハトが志願した。「大丈夫かい？何日も水の上を飛び続けることになるかもしれないよ」

「いいですとも。どうせ一度は死ぬ命、納得ずくなら悔いはありません。もし土地があつたらオリーブの小枝でも採ってきます。でも万が一、不幸にも私が帰らなかつたら、『テッポウ玉のハト』という墓を作ってください」

ハトは翌日の朝早く飛び立った。

「ざっと、こういった次第です。ハトは翌日の夕方帰つて来ました。ネズミにミミズの場所を教えてもらったとか、言っていることが少々曖昧なので、動物と話せる私がたしかめに來たんです。まさか、こんな素晴らしい土地が地上にあるとは。しかも神様まで付いて」

ノアは語り終わった。

「後悔してる」

「違うのよ。アタシが知りたいのは、世界には最初から草や木が生えてたの？」

「いや、最初はただの赤黒い土だけだったよ。そこに俺が草と木を生やした」

「それ、もう一度できない？」

ん？こいつは何を言ってるんだ。

マリアが割つて入った。「そうよ、砂漠の緑化なんて面倒なこと言うから時間がかかるんじゃないの。思い出してよ、あんたは神様だよ」

そうか、思い出したぞ。砂漠に草木を生やして、草原や森に変えればいいじゃん。

「ええと、ノアさん、ちょうど今、事情が変わつたみたいだ。一瞬待ってもらえれば六十万匹だろうが百万匹だろうがいいよ」

まず工事担当の子ども三匹と象を呼び戻し、砂漠のヘビ、トカゲ、虫などを少し遠くに退去させるようにテレパシーに頼んで、間違えるといけないからマップで範囲を確かめながら草と木を生えさせた。ついでに苔とかキノコも付けた。砂漠は一瞬で草原と森が変わった。なんだ、簡単じゃないか。

それから毎日、ノアの木造フェリーは川を往復して移民の動物たちを運んだ。不恰好な四角い船で、いつしかカナン動物たちに『ノアの箱舟』と呼ばれるようになった。

箱舟で到着した動物たちは、カナンの空気が澄んでいて、水はおいしく食べ物も安全なのに感激した。入管係のタイガ、ツンドラ、クレバスからカナンでの心得を聞き、一匹ずつタブレットを受け取って、それぞれに適した土地で新しい生活を始めた。

住める土地が増え、移住も順調で、神様はまたヒマになった。ヒマは好きだがヒマすぎる。やることがないのでタブレットでストーリーミングばかり見ていた。毎日欠かさず見たのはイエス劇場のライブだ。特に最終幕のトークショーは何度見ても飽きない。どうやって教え込んだのだろう、まだ子どもなのにイエスは聴衆を巻き込み、笑わせ、泣かせた。言葉には説得力があつて、タブレット越しでも、いつの間にかイエスのペースにはまってしまう。この子は大物だぞ。このキラキラしたカリスマ性はどうだ。俺にも少し分けてほしい。

んなことじゃ長老連合に怒られるだろうな。懸命に観察すれば俺にも世界を理解できるだろうか。これも自信がなかった。

やはり問題は人間だな。へたに小利口だけに始末が悪い。イエスの言っていることだって、よく考えてみれば全部当たり前のことばかりだ。それをイエスが改めて口にする人間たちは感動する。それとも、動物にとつては当たり前でも、人間には違うのだろうか。やはり自信がなかった。

「おい、聞いているか」何となくテレパシーを呼んでみた。

「はい、ご用で？」

「特に用事ってないんだけど、教えてくれるか？ 神様ってなんだ？」

「やだなあ、天竺教なんか触ったもんだから妙なこと訊いて」

「シッタールタとは関係ないよ。人間が言ってる神のこと。いやね、最初のころの見込みでは、人間は俺を担ぐと思ってたんだ。唯一無二の作り主だから。でも、ノアの話からすると、どうやら俺じゃないら

動物たちもイエスを見ていた。メスのライオンはイエスが映っているタブレット画面を何度もなめたため、液晶面がザラザラになってしまった。サルたちはイエスの動作を真似、オウムはイエスの声を真似た。

今やイエスはカナンのアイドルになっていた。スクリーンショットを集めたサイトが無数に立ち上がり、ポートレートの木に飾るのも流行した。しかし、だからと言って人間全部を好きになった動物は皆無だ。他のカメラに写るベツレヘムの映像で、人間の行動をつぶさに見ていたからだ。人間の社会や行動には、動物にとつて「どうして？」と理解不能なことが多すぎた。醜悪なこともありすぎた。

「とうちゃん、どうして人間にはお金があるの？」というキジシロの質問に、神様は「便利だからだよ」と答えたが、果たしてそれだけなのか、神様には自信がなかった。

自分が作ったはずなのに、世界は勝手に一人歩きを始めていた。コントロールなど思いもよらず、細部はもちろん、全体像さえ見えなくなっている。こ

しいし、そうするとイエスの親に当たる神様は誰なんだろう、って。いや、本当はわかっているんだ。イエスの父親が神様でもなんでもないのは、ハナポチたちの報告で知ってる。そうじゃなくて、人間たちが言ってるイエスの親のこと」

「さあね、誰でしょう。案外神様だったりして」

「俺？ よせよ、身に覚えのない子供は十二匹だけで沢山だ」

「わかってます、冗談ですよ。そう、たしかに人間には話のすり替えがあります。人間の言う神様って、精神界にしかないはずなんです。それが子ども作れるなんて、ニワトリがゴジラを産むようなもんでしょう」

「その喩えはよくわかんないけど、要するに人間の神様は、心の中、認識の中にしかないってことだよね」

「そうです。今日は勘が鋭いじゃないですか。認識されていれば、実在しようとするだろうと構わないわけで。あつ、実在するという概念も怪しいものなんですけど」

「実在の概念なんか、この際どうでもいいよ。だけ

どイエスは本物に神の子みたいに良い子だ」

「はい、彼の言うことは、聞き手が素直なら、マジに良いこと、正しいことばかりです。ただね、心配もありますけど」

「なにが？」

「おそらく彼の言ったことは後世に残るでしょう。そのとき余計な尾ひれが付かなきゃいいんですけど、まあ人間たちは都合の良い言葉を追加するでしょうね」

「どんな？」

「たとえば民衆を縛るための言葉です。地獄に落ちる、とか、神が許さない、とか、つまり言うことを聞かないと酷い目に遭うぞっていう脅し文句です。これはイエス以前の宗教でも多用されています」

「そんな怖いこと、イエスは一言も言ってないよ」

「そこですよ。洋の東西を問わず、宗教は恐怖を喚起したり価値観を画一化して権力と結び付けてしまわんです。宗教と権力、本来なら全然別物なのにね。神様みたいに、権力なんか面倒だと思ってるリーダーはものすごく奇特な存在ですよ。アタマに立った人間は例外なく権力を欲しがるし、そのため

に宗教を使うわけです。宗教を使ってマインドコントロールすれば統治は簡単ですから」

「人間のやりそうなことだな。なんだか胡散臭い」

「胡散臭かろうがウンチ臭かろうが統治が簡単で権力構造が強固になるなら、人間は何でもします。ひとつ言えるのは、宗教勢力と政治権力が手を結んだとき、最悪の世界になるってことです。自由な思考が完全に失われますから」

「それでもって、イエスの言葉を書き換える、ってこと？」

「はい、恥ずかしげもなくやるでしょう」

「あーあ、俺はネコ型でよかった。書き換えるも何も、俺の言葉なんか誰も残してくれないからな。ま、残すに値する言葉も言ってないけどさ」

「ついでにもうひとつ、経済と宗教が結び付くのもかなりマズいですよ。ほら、ベツレヘムのイザヤベダサン、あいつが見本ですね」

「あの詐欺師か。大体俺は、名前を二個以上名乗る奴は信じないんだ」

「今、動物がカナンに流れ込んでいるのだから、経済と政治と宗教が『正しい発展の方向』を決めた結

果でしょう。この三者が手をつないだとき、世の中は真っ暗になります。経済、宗教、政治は地獄の三位一体ですから」

「権力持つてる人間は、ますます何でも許される気になっちゃまうだろうな。こんなことなら間違っても免罪なんかしなきゃよかった。後悔するよ」

それから何年か経った。砂漠を作り換えたお陰で、どの動物からもたいした文句は出ず、小さな苦情やちよつとしたいさかいはあつたけれど、カナンではおおむね平穏な日々が続いていた。

その知らせはストリーミング放送の全チャンネルで一斉に流れた。『イエスの危機！』『ついに正義が！』等々で、イザヤ殺しを大々的に伝えた。総理大臣のマリアは「亡命するなら無条件で受け入れる」と即座に発表した。イザヤの事務所にはカメラが三台あり、それぞれの角度からの映像が繰り返し流された。事件の前、酒場での出来事からダイジェストにした『イザヤ事件の背景を斬る』という緊急番組も作られて、カナンの森と草原はアイドルが演じた会心の一撃、あるいは悲劇の幕開けに沸いた。

さて、どう対処したもんだらう。マリアはミーハーだからイエス擁護を表明するのは致し方ないが、俺までイエス崇拜に回っては宗教色皆無、政教分離のカナンではなくなってしまう。いずれどこかで何かを言わなきゃならないだろうな。でも、今すぐ言うのは、いかにもタイミングが悪いし、そもそも何を言っているかわからない。神様とはいえ、時流に応じて民衆を率いるのは難しいものだ。

「こんちわ、ノアです」

「ああ、久しぶりだね」

「ほんと、ご無沙汰してました。今日は折り入ってお願いがあります」

「イエスの助命嘆願運動でもしようって？」

「いいえ、もちろんそれは祈ってますが、そうではなくて子どもの名前とモニュメントのことです」

「子ども？ 誰の？」

「いや、お恥ずかしい、私のです。この歳で赤ん坊が生まれまして、女の子です。それで、神様に名付け親になってもらえればと。これ、写真です」

ノアはタブレットで赤ん坊を見せた。正直言って

かわいんだかサルっぽいんだかよくわからないが、とにかく「かわいいなあ」と言っておいた。

「みんなそう言ってくれます。半紙と筆ペン持って来たので、名前書いてくれますか？ 神様が名付け親になってくれれば本当のゴッドファーザーだ」

「そんな、いきなり言われても、人間の名前なんてひとつも思い付かない。えい、いや。ネットで見たことのある人間の女の子から選ばよう。えーと、そうだ、アンナにしよう。どこで聞いたのか忘れてしまったが、多分良い名前だろう。神様は半紙に『命名 アンナ』と書いた。

「アンナですか。ああ、いい名前だなあ。神様、ありがとうございます。七五三には必ず連れて来ますから」

「いや、いつでもついでのとこでいいよ。うん、この子は必ず美人になる。保証しよう」人間、一寸先は闇。先のこととはわからない。ただ、ノアに似なければ美人になるかもしれない。確率は半々だな。

「で、なんだっけ、もうひとつ。モニユなんとか」

「箱舟ですよ。まだ川に舫つてありまして、かなり古くなったから壊そうとしたら、息子たちやキリン

うです。それでも川が広いので、汚染された水は今のところ対岸沿いに流れています。もつと汚染がひどくなればこっちの岸の水も危ないです。だから川の中に堀を立てて、汚れた水をあっち側にだけ流すようにしたらどうかと」

「よくわかった。そりゃ心配だ。でもなあ、川の真ん中に堀を立てるなんて無理だよ。方法がないだろう」

「じゃ、長い中洲を作るのはどうですか？」

「中洲や島は国防上の大問題になるかもな。人間が中洲を中継基地か軍事拠点にしたらどうする？」

「それなら堀しかないですね」

「うーん、堀じゃなくて逆浸透幕を張り巡らすのはどうだ？ 俺もよくは知らないが、水は通るけど毒は通らないものらしい。幕をカーテンみたいに川の真ん中に張るっていうのは？」

「そんなすごいこと、どうして知ってるんですか？」

「だてにネットばかり見てるわけじゃないよ」

テレパシーに言い付けて、長さ三十キロ、幅百メートルの反物を作らせ、天使たちを駆り出して川の中に底まで届く巨大な幕を張らせた。天使たちは羽

が、カナン国とこの船があったからこそ生き延びられたんだと申しまして、船を後世に残すためにアラファト山の中腹に飾りたいと言ってるんです」

「あんな大きいのを山に持ち上げるの？ 大変だよ」

「ええ、でも、どうしてもアラファト山です。川の中ほどまで来るとあの山が見えるので、船の方向を向けていました。ですからアラファト山は新生活への希望、私たちにとってはカナンのシンボルなわけですよ」

「なるほどな。じゃ、誰も怪我しないように注意してやるならいいよ」

「今でもどこかの山の中腹に船の跡があるのは、このとき神様が許したからである。」

「早速取り掛かりますが、もうひとつ、お願いというよりご注進がありまして、川の真ん中あたりに堀を立てたらいかがかと」

「堀？ 川の中に？」

「はい、対岸の上流に工場地帯があることは、以前お話ししましたね。最近では石油や化学関連の施設もできて、ますます水を汚しているとハトの偵察隊が言っています。近くには、もう魚は一匹もないそ

が生えてはいてもやはりネコなので、水に濡れるのが大嫌いだったらしく、ギャーギャー文句を言ったが神様はシカトした。後日、この件で久しぶりに長老連合から抗議文が届き、神様は始末書を書いた。

なお、他の歴史的文献では海の水が左右に割れて乾いた道ができた、とされているらしいが、その話は一本の川を二本に分けたこの事実に由来する。神様は逆浸透幕と決める前に、川を真ん中で割ることも考えていたのだが、人間に使われる可能性があるものでやめたらしい。

イエスブームは収まるどころか日増しに盛り上がった。もちろん神様もイエスの行動をリアルタイムで見ている、流星を飛ばしたり日食を起こしたりしてやった。人間への過剰な介入になるかもしれないが、そんなのもうでもよかった。

ある日、神様が森を歩いていると子リスが近付いて来て言った。「こんにちは神様。ボクはイエスのファンです。それで訊きたいのは、イエスが祈っている神様って、神様のことですか？ なんかし違いう気がするけど」

素朴だが核心を突く質問が投げかけられた瞬間だった。ノアには「神様は何人いても構わない」とか言って誤魔化したものの、子リスを納得させる説明は、相手が無垢なだけに、かなりやかいかいだ。「そうだね、少し違ってるかな。だけどイエスはまだ俺に会ったことないから、ちよつと間違えてるんだと思うよ。イエスが祈ってる神様だって、すごく立派なんだ。安心していいからね」

「誰に頼んだらいいんだろうねえ。たとえば明日は晴れにして、なんていうのなら俺にもできるけど、毎日はないな。なんか都合でもあるの？」

「おおあります。雨がたくさん降ると巣穴が水浸しになります。大雨が降る日がわかっていれば巣穴を高い場所に移せますから」

「なるほど。んじゃ、最初から高い場所に巣を作ればいいじゃない」

子リスが俺の答えに違和感を持つまでに、あとどのくらい時間があるだろう。その前に問題を整理しなくちゃ。

「名案ですね。帰ってみんなに伝えます。それから、もうひとつ」難しいことはホテル・シオンの役人に訊いてくれ、と思う神様を無視してスナネズミは続けた。「昨日、人間のネット放送を見てたんですが、この世は丸いんですって？ ホントですか？ なんてもマゼランとかいう人間が世界一周したって」

また、その同じ日、神様が野原で寝転がっていると、スナネズミが来て言った。「いい天気ですね。天気も神様が決めるの？」

「一周？ いや、東西南北どっちに行っても行き止まりだと思ってたけどね。マゼランはマップの中をぐるっと回っただけじゃないの？」

「いや、勝手に決まるんだ。毎日『明日の天気はどうしよう』なんて考えるの、面倒だから俺はやらない」

「そうなのかな。でも、この世界は球だとも言ってます」

「いやはや、そりゃ突拍子もない話だぞ。どうして人間はそんな荒唐無稽なことを言い出したのか。」

おいおい、今日は動物相談室か。

「なんかの間違いだと思うよ。でも、教えてくれてありがとう。すぐに調べてみるからね」

これ以上ウロウロしていると、また誰かに難題を押し付けられそうな気がしたので、神様は急いで屋根裏の執務室へ戻った。

地球説のことですよ。そうねえ、合ってるって言えば合ってるし、本当は間違ってるんですけど」

「どっちなんだよ」

「存在と認識の違いみたいなもんですよ」

「まったくわかんない。子リスに説明するつもりで言つてよ」

「おいマリア、東でも西でもいいから、ずーっと、どこまでも真っ直ぐ行ったらどうなると思う？」

「へんなもの拾い食いしたんじゃないの？ 夢みたいな馬鹿言ってるんでないで昼寝でもしたら」

「そうじゃなくて、マジに訊いてるんだ。世界の端はどうなってるんだろう」

「そこまで低レベルですか。まあいいや。まず、本当のところ、世界は平らです。丸くなんかありません。世界の端っこはブツ切れていて、先には何もありません。完全に無です」

「壁なんか立ってるの？」

「だから、完全な無ですよ。壁はありません。何も無いんです。ところが、別の次元だとそこには亜空間があつてねじれてるんです。メビウスの帯ってわかりますか？」

「アタシが知るわけじゃないでしょ。そんな世界の端っこまで行く気もないから知つてもしょうがないし」

「博多の帯なら知ってる」

「訊くんじゃなかった。難しい説明をしても無理そうなので、ごく簡単に言うと、東側の端っこは西側の端っこを連続するようにつながってます。えーと、葉っぱをぐるっと丸めると輪になるでしょ。あんな感じですよ」

「で、どうなってるの？ 世界の端っこは」

「はいはい、呼ばれる前に来ました」早速テレパシーが答えた。

「またテレパシーかな。」

「それって、人間が言ってる世界は球体だつていう」

「それって、人間が言ってる世界は球体だつていう」

神様は葉っぱを丸めることを想像した。たしかに両側がつながって丸い輪になる。

「わかった。でもさあ、そうだとすると地面も海も丸まってるの？」

「あーあ、だからわかりやすく説明するのは無理なんだ。あのね、地面も海も、あくまで平らですよ。平らだけれど、空間が曲がってるんです。まーるくね」

「んじや、北と南は？」

「同じですよ。やっぱりつながっているように感じられます。空間が曲がってますから。だから人間は世界は球だなんて言ってるわけです。そう感じられるだけなのに」

「なんだ、感じるだけか。安心した」

「神様、実際のところ全然わかってないでしょ。文科系だから仕方ないか」

「うん、それも世に恥じないほど出来の悪い文科系」
「それは恥じています。ことのついでに、最近人間は『空が動いているんじやなくて地球が動いている』って言ってるの知ってますか？」

「えっ、危ないなあ。地面が動いてるなら、どこか

につかまらなくちゃ」

「平気です。ウソですから。地面が動いたりするものですか。動いているのは空ですよ。だって、空を作ったのは神様でしょ？ 太陽や月や星も神様が作った」

「そうだよね。俺がやったんだ。実際のところ、どういう仕掛けになってるかは知らないけどね」

「簡単ですよ。空は大きな一枚の幕です。スクリーンみたいな感じ。太陽と月と、動き回る惑星にはそれぞれ係りの天使がいて、マニュアルに従って動かしています。太陽だけは大きくて重いので天馬二匹で引っ張ってます。その他の動かない星はLEDですよ。この前まではガス灯でしたが、省エネブームで取り換えました」

「へえー、そうなんだ。知らなかったな。で、その、星がくっ付いている幕なんだけど、地面からどのくらい遠いの？」

「ほら、また困った質問だ」

「そんなに困るかなあ。大丈夫だよ。わかったところで梯子なんか掛けないから」

「そういう意味ではなくてですよ、距離的には百キ

ロ程度しかありません。かなり近いですよ。でも、人間にとつて、それは数十万キロや数億キロにも感じられるんです」

「わかった。また空間の曲がりだろ？」

「うわっ、知ってるんだ」

「うん、空間の曲がりって何だかわかんないけど、へんなことの原因は全部それみたいだから」

「まあ正しいです。本当はこの場合、空間密度の連続的变化なんです。原理は曲がりと同じですから、ほぼ合ってますよ。空間の密度が、地上から離れるほど濃くなってるんです」

「わかんないな」

「えーと、梯子を登るサルがいたとして、秒速一メートルで登るとしてですね、登り初めはたしかに一メートルでも、上に行くほど、サル自身は秒速一メートルで登っていても、地上から見ると秒速一ミリになっちゃいます。そんな感じですよ」

「かわいそうなサルだ。誰か教えてやればいいのに」

「そういう話じゃないんですけどね。まあいいや」

「ふーん。じゃさ、その幕の向こうはどうなってるの？」

「はい、広漠とした亜空間です。空間でもなく無でもなく、ただ何も無い状態が広がっています。ごくわずかにですがエーテルが存在しますけどね。これ、人間の科学ではブラックマターと呼ばれていて、謎の物質だそうで」

「つまり、簡単に言えばなんにもない、つてことだな。少しずつわかってきたぞ。最後に訊くけど、太陽と月は、どんなもので出来てるの？」

「厚手のボール紙を切り抜いて作りました。月は満ち欠けがあるので何種類か用意してあって、その日によって使い分けてますし、太陽は表面に油を塗ってます。明け方に火を点けます。どちらもかなり大きいですよ。そうだなあ、カナンより少し大きいくらいでしょうが」

「面白そうだね。テレパシーは行って見たことある？」

「ないですよ。知ってるんだからわざわざ確かめに行くことはありません。でもそう、カナンでは雲ドライバーのサルが何度も行ってます。太陽の近くとか月の裏側とか。彼は物好きですからね」

十次元世界

神様はにわかには科学者になった。星や太陽の正体がわかってとても嬉しいのだ。仕入れた知識を周りの動物たちに教えて回ったが、ほとんどの動物は興味を示さなかった。話を聞いてもまるっきり感動した様子はなかった。父をかわいそうに思ったクロだけが少し興味ありそうふりをした。

それでも神様はめげずに独学を続け、人間の書いた科学入門書を読んで、「あはは、大誤解してるね」とか「こいつの洞察力はイモムシ並み」などと勝手なことを言っていた。勉強というより、誤解に基づいた科学のあら探しに近い。それでも、時には実験してみたくなる定理を見つけたりもした。

「クロ、そこでニャーと鳴いてみる」神様はクロから一メートル離れて命じた。クロは鳴いた。次に神様は二メートル離れて、「さつきと同じ大きさの声で鳴いてみる」と言った。クロはまた鳴いた。

へんだな。距離が二倍になれば音の大きさは四分の一になるはずなんだが、ちっとも変わらないぞ。

「でも、世の中にはゼロのことだってあるだろ。獲物がゼロとか賃上げゼロとか」

「意味を間違えてるようですね。でもまあ、はい、ゼロに何を掛けてもゼロです。これでいいですか?」
「やっぱりな。それじゃ分数で、分母にゼロが来たらどうなる?」

「それも禁止手ですよ。そういう分数は無いんですけど、強いて言えば答えは無量大です」

「ほらみる。俺の推測は正しかった」と、神様はクロの声が無限の大きさになるだろうことを話した。
「また七面倒な。どうして明るく希望を持って素直に科学を学べないんですか。迷宮にばかり入り込みたがる」

「だって神様だよ。いきなり本質をえぐるのさ」
「悪い性格ですが治らないから仕方ないですね。ええと、クロの声は無量大にはなりません。ただ、それを説明するには、ものすごく高級な数学が要ります」

「数学はダメ。関数でわかんなくなつて、それっきりだから。その、高級な数学のところを飛ばして説明できないの?」

エネルギーは距離の二乗に反比例する、と本に書いてある。十メートル離れば百分の一になるはずだが、やっぱりそれほど変わらない。じゃ、この定理はウソか。まあウソでもいいや。遠くの音は小さく聞こえるから、それだけで充分だ。

ここでやめておけばよかったのに、神様はヒマだった。今度は逆に、音源が近くになった場合を考え始めた。クロが半分の距離で鳴いたら音の大きさは四倍になる。うん、これはわかる。それじゃ、もつと近付いて、距離ゼロで鳴いたらどうなるか? 神様は少し怖くなった。音は滅茶苦茶に大きくなって無限の音量になるはずだ。いや、いくらクロが俺の子でも、そんな雷みたいな大きな声を出せるはずはない。でも、定理だと無限の大きさになる。だって、ゼロの二乗はゼロのはずだから、分母がゼロなら、分子にゼロ以外の何が来ても無量大になる。文科系でも、一応は頭の中で分数の式を書いてみたのだ。

「おい、訊きたいんだけどな」例によってテレバシーを呼んだ。「ゼロの二乗はいくつだ?」
「算数ですか。あのねえ掛け算や割り算でゼロを使っちゃいけないんです。常識ですよ」

「そんなことしたら結論だけになっちゃいますが」

「いいよ、結論だけ聞きたい。枝葉はいいから最後だけ教えて」

「途中経過は枝葉じゃないんですけどね。ま、仕方がない、言いますよ。結論としては、この世界が十次元だから無量大にならないんです。理由は数学を使うので省きますけど。ふつう、動物は三次元までしかわかりませんよ。タテ・ヨコ・高さです。人間はそれに時間を加えて四次元までわかるって言ってます。でも、実際はこの世は表面的には五次元なんです。他の四つの次元を制御する、いわばファイルのヘッダとか履歴というか、そんな属性を保存というか制御というか、そうする次元がひとつくっついて五次元になります。ここまでいいですか?」

「ああいいよ」神様は寝転がって聞いていた。

「ホントかな。怪しいけど続けますね。ところが、五次元でもまだ足りません。世界は十次元ですから。わかりますか?」

「うん、十次元ね。わかるよ」

「ウソだあ。こんなこと直感でわかるわけがない」

「神様にはわかるんだ」

「ま、信じましょ。それでね、余った五次元はどこにあるかというのと、実は世界がもうひとつあるんです。ちよつどこの世の裏側に」

「もうひとつ？ 予備かなんかかな」

「んなわけないでしょ。神様がこの世を作ったときに裏側も一緒にできました。でも、完全に独立してて、あつちに神様はいません。創造主としての神様っていう意味では」

「そうか、パラレルワールドだ」

「近いけど違います。こつちと関係なく、勝手に進歩というか変化してます。動物も人間もいて」

「面白そうだね。行けるの？」

「不可能じゃありませんが、よしといたほうが」

「どうやったら行ける？」

「一箇所だけ通り抜けられる穴がありますけど、案内はしませんよ。海の底ですから」

「どこの海？」

「えーと、わかるかな。ここから西にずーっと行った所にあるバミューダトライアングルという海域の真ん中です」

条の神様としてはとても珍しいことだ。

カナンのアイドル、イエスが村々で布教している様子はトンボ型神の目、ネズミ型神の目、フクロウ型神の目などを通して二十四時間リアルタイム放送されていた。神の目の種類が増えたのは、当初トンボ型だけだったとき、一機が昆虫採集で捕まっって、小学生の夏休みの宿題になってしまったからだ。そのため、トンボ型の機体番号U2は、今でも学校の教室を写している。

イエスの説教は、動物として当たり前のことしか言っていない。それでも話芸として一流だったので、カナンの動物たちの評判はこの上なく良く、次はどんな村に行き何を話すのだろうか、動物たちは毎日楽しみにしていた。神様は、イエスの布教活動が始まってからは一切介入せず、奇跡っぽいことは何も起こらなかった。

そのころ、カナン国情報部では、担当大臣のタイガがイエスとは違う画面を監視し続けていた。ローマ帝国とエルサレムだ。エルサレムにはベンダサン

探検隊を組織しよう、と神様は勇み立ち、裏世界探検の計画をマリアに話した。隊長はもちろん神様自身だ。すると、「あんたねえ、こつちの世界ひとつも満足に仕切れないのに、世界をふたつも、どうやって面倒見るのよ」と、あえなく却下されてしまった。ロマンのないネコだ。

俺は知りたいだけなのだ。単なる観光客として裏世界に行きたいだけなのに、いきなりダメはないだろう。でも、マリアの反対を押し切って行って、何かマズいことが起きたらミソクソに言われるに違いない。残念だがこの計画は中止しよう。探検はやめるが情報収集だけはしておきたい。カナンは戦力ゼロで専守防衛なんだから。

嫌がるテレパシーを宥めすかし、少し脅しもして、神の目無人偵察機ワシ型を三機、裏世界に潜入させたのは、それから一週間後のことだった。偵察機からの電波は、月面に反射させる方法でカナンに届いた。しかし、最初の二十四時間を見た神様は、何故かストーリーミング視聴にアクセス制限をかけて、見られるのは神様だけにしてしまった。全面公開が信

が信じる古い宗教の本部があり、考えられる限りの謀略を練っていた。一方ローマは謀略の面では単細胞で、問題を片付けるのに力しか使う気がなく、次はどこに攻め入るかだけを考えていた。このように、双方がそれぞれ勝手に動いている間はいいが、何かのきっかけで手を結んだら、とんでもなく面倒なことになりかねない。神様は危険を感じ、タイガのチームに徹底監視を命じていたのだ。

この時期、神様が見ていたもうひとつの世界、裏世界がどんな様子だったかは推測するしかない。記録が一切無く、神様は誰にも話さなかったからだ。ただ言えるのは、裏世界は、この世界の未来像そのものだったらしい。

権力の野合

カナン国情報部は、ベンダサン商会の手代が行商人に化けてローマに入ったのを察知した。手代はエルサレムの宗教本部にも出入りしている古手で、イザヤの懐刀とも噂されている人物だ。ある夜、手代は場末の酒場でローマの参謀と会っていた。ゴキブリ型集音機によって二人の会話が、ハエ型偵察機によって映像が記録された。

「お国も迷惑されていることでしょうか。あのよう反体制思想を煽られると」と手代が言った。

「いや、わが国は磐石であるから、善人ぶった青二才の一匹など誰も気にせん。それより、人心を惑わされて困っているのはエルサレムの神殿筋ではないかね」参謀は威張った声だ。

「まあまあ。たとえどちらも困っていないなくても、害虫は退治するに限ります。お国と私どもの神殿が決して仲睦まじくないのを承知の上で申し上げますが、畑に入った害虫は、放っておけば隣の畑も荒らします。早く殺さねば」

「害虫を殺すことに異存はないがね、それはそつちの問題だと理解しておる。神殿に後足で砂をかけた異端者が、新興宗教を起こしたに過ぎんだろう。単に宗教の問題だな。政治家としては、へたに宗教に関わって火傷しても損だ」

「それもひとつのご賢察です。しかし火の手が強くなれば火事は誰にも消せなくなりませう。害虫も同じこと。来年のナザレ地方の年貢はどうなりますでしょうか。いや、これは余計な心配でした」

「税収の心配とは、お心遣い痛み入る。まだ酒が足らんようですね。ローマの酒は世界一だ。存分にやっていたらいい」

その後、二人は当たり障りのない話をして酒場を出た。出る直前に、手代が「ベンダサンからの土産です」と何かを渡した。カメラに映った限りでは、それはカネの入った皮袋のように見えた。

三日後、手代と参謀は別の酒場で再び会っていた。「軍人さんに申し上げるのは恐れ多いのですが、敵の敵は味方ではございませんか？」

「今夜は兵法の講釈か」

「滅相もない。ただ、お互い、大きな権力を持っているからこそ仲が悪くいられるのでは、と思ったまです」

「面白いことを言うやつだ。それがどうした」

「もし仮にですが、片方が、そうですね、神殿筋が権威をなくしてしまつたら、お国と仲が良いの悪いのという話ではなくなります。ひたすらお国が強いだけになりますでしょう」

「おお、いいね。あるべき姿だな。と言って、ローマがエルサレムを滅ぼすなど、よほど低劣な頭脳でなければ考えられんが。神殿は即座に燃やしても民衆の心までは燃やせん」

「そうですね、そこなんです。現在のパワーバランスを保つことこそがお互いの繁栄の基本と考えております。お国は民衆の支配権を強化する。神殿は民衆の心をコントロールする。このバランスが崩れてはいけません。いかがでしょうか？」

「とりあえず賛成しておこう。だが、ベンダサンが民衆の財布を握って、いいように扱っておることは天下に知れておるぞ。それは数えんのか」

「いやいや、ベンダサンとしましては、お国に年貢

をきちんと納めることを奨励しております。毎年キャンペーンを張っているくらいで」

「まあよい。ローマは予定通りの税収を得て兵隊を集められればそれで良いのだから」

「では、お国の末永い繁栄を祈念して、乾杯いたしましょう」

二人は乾杯した。三日前の『土産』が効いたのか、参謀の表情は緩んでいた。それを見定めたのか、さりげなく手代が切り出した。

「ところで、仮にイエスという若造を取り押さえるとして、あの者も元はといえば私たちの信徒、ローマにご迷惑をおかけすることになります。ご出費もさぞ多くなろうかと」

「そうさなあ、十万タラントでは済まんだろう」

「私どもの総帥イザヤが申しますには、相応の費用を負担させていただけませんか、と」

「良い心がけだ。軍部の予算は限られておるから」

「それに、人様のお世話になるのに半紙一枚お渡ししないようでは世間を渡れません。どうかこの半紙をお受け取り願いたいのですが」

手代が出したのは紙は紙でも半紙ではなかった。

ベンダサン発行の小切手だ。参謀は目をパチクリさせて金額を見た。百万タラントと書いてあった。「いや、素晴らしい心がけだ」参謀は息を荒くして、やっと言った。「近々一斉手配をしよう。ご希望の処刑方法などあるかね」

「処刑方法など、そのような差し出がましいことは申しません。ただ、害虫が死んだことを広く世間に知らせていただければよろしゅうございます」

「なら十字架張り付けがよかろうな。晒し首より効果がある」

「さすが参謀様。ぜひそのように」

「なに、造作も無いことだ。エルサレム近くの髑髏ヶ丘で張り付けにしよう」

「ぜひぜひ。それに、もうひとつお願いがあるのですが」

「手間がかかることは聞かんで」

「いいえ、簡単なこととして、金魚の糞のようにイエスに従っている十二人は捕らえないでいただきたいのです。放っておいていただけませんか」

「おや、根絶するのではなかったか？」

「イエスが死ねば、あの妙な危険思想は終わります。

十二人の始末はベンダサンにお任せいただきたい。それに、偉大なローマが、イエスの運動ごときで十三人も死刑にするなど、かえって沽券に関わるかと存じます」

「それもそうだ。たかがナザレの小さな事件だ。一人死刑にするくらいでちょうど良いだろう」

手代と参謀はさらに酒を酌み交わし、前回よりも酔っ払って別れた。

担当のタイガは、あまりの重大情報に全身の毛が逆立ち、瞳孔も拡散して、しばらくはディスプレイも見えなくなつた。もしかして、これはものすごくヤバいかもしれない。とうちゃんとかあちゃんに知らせなきゃ。情報部の洞窟から這い出してホテル・シオンに走った。

「とうちゃん神様ア、かあちゃーん、大変だあ。ベンダサンがローマに行って、ローマが小切手もらつて、髑髏ヶ丘で十字架張り付けになりそうだ。イエスが殺されるう」タイガは一息に叫んだ。

「うるさいよ、お前は。ギャオギャオ言つてたらワケわかんないだろ。水でも飲みな」マリアに怒鳴ら

れて、タイガは少し落ちつくことにした。

神様のタブレットで手代と参謀の密談を再生すると、今度はマリアがおろおろし始めた。

「ねえ、なんとかならないの？ イエスに逃げろって教えるとか、ローマを潰すとか」

「無茶言つな。俺だつてどうにかしたいとは思ふさ。でもなあ、人間の活動にはこれまですつと不介入できたから、今更なあ」

「不介入？ よく言うよ。そういう態度つて、当たらず触らず、とか、日和見とかいうんだ。あんたは神様だろ、正義のひとつもやってみせてよ」

「弱つたなあ。俺は突発事件には対応しづらい性格なんだよ。どっちにしても、一時の感情だけで行動を起こすのは間違いの元だから、考えながら少し様子を見ていようよ」

「はー、あきれるね、まったく。そんなことだから神様なのに権威もなにもないのさ」

「権威も神威も、最初から要らないんだけど。じゃ、こうしよう。情報部を中心に、これからは二十四時間体制でイエス周辺とベンダサンを重点的に見張るんだ。それで、イエスの命に関わりそうな動きがあ

れば、すぐに助け出す。隕石爆弾でも何でも使つて約束する」

マリアは納得するしかなかった。神様は何も考えていなさそうで、時々は考えていることもある。今はどっちだかわからないが、とりあえずイエスを見殺しにはしないだろう。もし殺したら、神様を追い回して食い付いて、全身の毛を引っこ抜いてやると決意し、それからクロを呼んで、「特番の用意をしておいたらいいかもしれないよ。事件が起こるような予感がするんだ。ただのネコの勘だけだね」とさりげなく訳ありげに伝えた。

訳注…ここから偽神紀其の二の『イエスの災難』の真ん中あたりに続きます。もう読んだでしょ？

イエス生還

訳注：それでこの後、トイレットペーパーキストではカナンの動物がイエス助命嘆願の大騒ぎをしたり、神様の方針が一向に決まらず、カナン国政府が動物たちの突き上げを食らって狼狽したり、そんなことが書かれているんだけど、それはいいとして、偽神紀其の二が終わったところから続けます。偽神紀を読んでいればお話が飛ぶことはありません。

サル雲はホテル・シオンの玄関前に静かに着陸した。傷心のイエスはサルに助けられて身を起し、周囲を見渡してもう一度気絶しそうになった。ライオンと象とオオカミが最前列でイエスを見おろしていたからだ。

「ほら、少し離れてよ。イエスが降りられないじゃないの。記者会見や講演会なら、あとでいくらでもやるから、ちよつとどいて。どきなさいっ！」マリアが群集を引き剥がしにかかった。

「こちらお前ら、それが賓客を迎える態度か。カメラ

来る人がいるものだと思って感心してた」

「どうも恐縮です。ところであなたは？」

「あつ俺？俺は神様です」

「うっそー、いや失礼しました。神様といえば人間の形で、慈愛に満ちた眼差し、上品な仕草、偉大な包容力、そんなお方と信じていたので」

「えーと、イエス君。っていうことは俺は汚いネコ型で、目つきが悪く、振る舞いが下卑ていてセコい。そう見えるのかな？」

「申し訳ありません、失言でした。撤回します。そうですね、よく考えてみれば、創造主はなにも人間型でなくともいいわけですよね」

「まさにそう。君が信じている神についての神話は人間がでっち上げたものだよ。動物の中で人間がもっとも優秀だって言いたいたためだ。すべての間違いはそこから始まっている」

「ああ神よ、天地がひっくり返るほどのカルチャーショックです」

「イエス君、長旅から帰ったばかりで、さぞお疲れだろう。少し休んだらどうか。話はそれからだ」

イエスは三日三晩眠り続けた。

に写つてから全世界に中継されてるぞ」神様が言うど、群集はいきなり行儀が良くなり雲から離れた。神様は雲に近付き、イエスの手をペロツとなめて言った。「よく来たね。カナン国動物の総意で君を歓迎するよ」

いきなりそんなことをネコに言われても、人間のイエスとしてはどう答えればいいのだろうか。

「ここはカナンという国ですか？どのあたりにあるのでしょうか？」

「そうだな、ベツレヘムから人間が歩いて二週間くらいかな。カナンは動物たちの約束の地だ。まあ、ここではなんだから迎賓館に入りなさい」

迎賓館とは、シオン・ホテル二階、一番奥の部屋のことだ。神様が言うには、窓から飛び降りるとすぐに水場なので、ホテルで一番便利な部屋なのだからだ。

「ナザレのイエスと申します。生まれはベツレヘムの馬小屋で、父はヨセフ、母はマリア、生まれたときから神の子で、」

「いや、お若いのに、仁義は省きなさい。君の活躍は細大漏らさず見てました。人間にも正しい判断の出

イエス到着の様子は、もちろんライブで配信され、ニュース以外でも特番が組まれた。雲のサルはどの番組にもゲストで出演して一躍有名になった。記憶力の悪い動物のために『イエスの軌跡』という、生まれてからこれまでの生涯を描いたドキュメンタリーも繰り返し放映された。

そんな中、クロたちは悩んでいた。イエスがカナンに来てしまったからには『今日のナザレ』は打ち切るべきだろうか。それとも、人間ウォッチの意味で、時事番組に近い位置付けで続けるべきか。公共放送の責務として続けるべきという原則派と、誰も興味がないだろうから無駄だという現実派に別れ、延々と話し合ったが、みんな眠くなったので寝た。

ホテル・シオンには贈り物を持った動物たちが押しかけた。ほとんどが果実や魚といった食べ物だったが、河南寺のネコ三匹は写経した般若心経を持って来て、イエスならわかるはずだと言い張った。

四日目の朝、ようやく目覚めたイエスがロビーに下りてきた。

本文書について、各界のコメント

「あら、おはよう」マリアが気楽に声をかけた。「お世話になります。お陰様でぐっすり眠れました」「よかったね。木の実と果物ならあるよ。食べる？」動物たちの貢物の中から旨そうなところを選んでテーブルに啜えてきてやった。イエスは旨そうに、子どものように食べた。

「アタシはマリアっていうんだ。このホテルのオーナーでカナンの総理大臣」

「マリア、さん？僕の母と同じ名前です」

「そうだった、そうだった。だけどあんたの母さんの名前は、本当は」と言いかけたとき、神様が屋根裏から下りてきて、「いやあ、いい朝だ」と大声を張り上げた。そして、「偶然だろうよ。マリアなんてどこにでもある名前だから」

神様はマリアに露骨にガンを飛ばし、マリアは黙った。

「ところで、髑髏ヶ丘の穴で打った腰は大丈夫かな」

「ええ、もう痛くありません。全部知ってるんですか？」

「もちろん知ってる。神はほぼ全能だし、不可能はおおむね無い」

「その、ほぼ、とか、おおむね、とかが多すぎるんじゃないの？」マリアが口を出した。

「うるさいなあ。どっかに行行ってたら？」

「やだ、ここにいる」

「じゃ、黙ってる。自称、寡黙なネコだろう」

そんなこと、アタシ言っただけ？ そうだ、創世記で、出まかせに言ったことあったっけ。

「カナンでは国中の動物が君の活躍を見ていたよ。ほら、こんな画面に映るんだ」神様はタブレットを見せた。イエスは不思議そうに、映し出されたベツレヘムの風景に見入っている。

「絵が動くんですね。これはいつの景色ですか？」

「今だよ。世界中どこでも見えるからね」神様はエルサレムやローマ市街などに切り替えてみせた。

「すごいなあ。神が作ったに違いない」

「いや、俺はこんなもの作らない。人間が言う科学技術っていうものの産物でね、九十九パーセントの理論と一パーセントの幸運で動いてるんだ」

神様はイエスにもタブレットを一台持たせることにした。この青年が広く世界を知ったとき、一体どう反応するか楽しみだ。

【ギンタ談】

タマさん、最近神様神様って。トイレトペーパーの呪いじゃなければいいけど。へびもそうだけど長いのは危ないんだ。

【長野の長老談】

わしは裏世界に行ったことがある。光は闇で闇は光の、それはおぞましい場所じゃよ。生還したネコは皆無というではないか。

【ニヤニヤン談】

やっとなどもたちをカルトから救出しました。また遊びに来てください。ユフちゃんも会いたがってます。歌合戦したいって。

【ムラタ談】

おれも結構忙しかったんだ。桃花平に出たりしてたから。コメント？まだないよ。これから読むからね。これ、面白いの？

【ミッチャン談】

タマがPCを離さないで、仕方なくもう一台買いました。今度のはタブレットにもなるノート。ベッドに潜っても使えて快適。

【薄ぐれのマサ談】

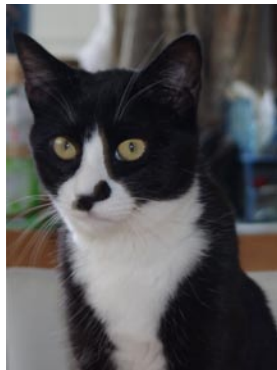
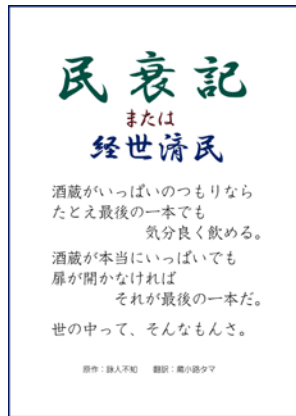
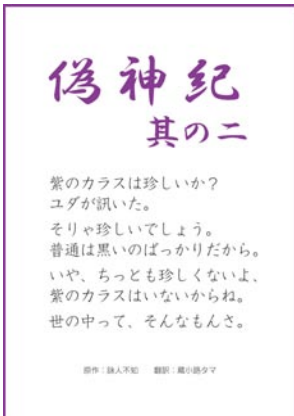
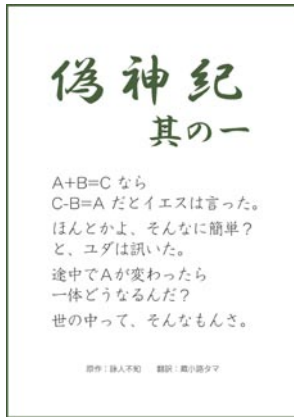
神様ってネコ、うめえ具合に、どうにかシマあ守ってるようだな。強欲な人間なんぞに明け渡しちゃいけない。いざとなりや加勢に行くぜ。

【長野のシュレ談】

当該文書は論理的整合性に優れ学術的価値としては類似文書を遙かに凌駕し最高水準の第一級資料であると一学究として再び確信します。

【タケチヨ談】

こんなに長いのに犬は一匹も出てこない。おかしいよ。次に出さなかつたら、タマ、ちよっと話があるからね。マジだよ。



アシスタントやっています

救命記

発表日
 新シク暦 1393年 3月 23日
 フツーの西暦では 2014年 6月 13日

著ネコ：蔵小路タマ (イラストも)
 仕方なく著作権管理させてる人：大塚明

いないだろうけど、転載するときは管理人に言ってね。黙ってやったらヒッカク！

著ネコ近影



パスポート用に撮られた。不愉快



ほら、いろんな裏話がわかったでしょ。ノアは神様に選ばれたんじゃないで、いわば亡命したんだ。イエスは新しい文化に触れてカルチャーショック中。十次元世界の半分の五次元で、どーゆーことなんだろう。アタシとしては神様が封印した『もう半分』が気になるところ。で、すべての答えは残りのトイレットペーパーに、なんだけござあ、トイレットペーパーまだゴツンにあるのよ。読んでないのもたくさんあるし、読めない字のもある。

ところで、結局のところ人間の倫理や哲学って二元論から離れられないのよね。善と悪、白と黒、正常と異常、そういうったものの対立の中にしか価値を規定できないんだ。ホントに正直。だから融和より対抗の方向に走っちゃう。ネコ型神様は、そういうのを否定して思うの。だからギリギリまで決断しないし動けない。多少はグズなところもあるけどさ、相当我慢してると思う。だけど、我慢とか無言とかは、ある種の人間にとっては承諾と同じ。アタシとしては、神様も人間たちも、自分たちの『モノの見方』で相手を見てるから、お互いに誤解しあってるんじゃないかな。今のところ神様はまだ人間を『保護』する気があるみたいだけど、いったんサジを投げたらどうなるでしょう？ そんなに遠い話じゃないと思うよ。

んじゃ、またね。

タマ